

予

幻

品川駅港南口こうなんぐちからのびる大通りを曲がったところでキリは足を止めた。フェンスで囲まれた空あきの向こうを運河が流れている。

以前は倉庫や古い雑居ビルだったものが、この一年で解体され更さら地にされたのだ。

このあたりで大規模な再開発がおこなわれていることは知っていた。手がけているのは新興のデベロッパーで、バブル時代の地上げを思わせるような強引な手段で土地を買収しているという。

背後に暴力団や政治家がいるという噂もあるが、本当のところはわからない。

キリの住居はそこから二百メートルほど大通りをいった場所にある一戸建てだ。「八やツ山やま螺ネ子ジ製作所」という看板を掲げる古い町工場を、居抜きでそのまま借りている。

大家は町工場を経営していた老人で、今は引退し和歌山の娘夫婦の家に身を寄せていた。

その大家からひと月ほど前にハガキがきて、「売ってくれという申し出があったが、あんたが住んでいるあいだは売らないと伝えた」と書かれていた。

キリは品川駅構内のスーパーマーケットで買物をした帰りだった。

気配はスーパーの店内で感じていた。監視者の視線が熱線のように背中に浴びせられていたからだ。

駅をでてからも熱線は浴びせられつづけていた。

尾行と呼ぶにはあまりにも稚拙で、「つけまわす」という表現がぴったりにくる動きを相手はしている。

プロのボディガードという職業柄、感謝されるのと同じくらい恨みを買っている。警護対象者に危害を加えようとして、手ひどくキリに痛めつけられた者はひとりふたりではない。

そういう奴らに自宅をつきとめられないよう、外出先から戻るときは気を使っていた。タクシーを家の前まで乗りつけることはせず、尾行者がいたら気づくだけの距離を徒歩で移動する。

例外はプロドライバーの大仏に送ってもらうときくらいだ。大仏は尾行がつけばただちに気づく。大仏の車にとりつけられた赤外線カメラは手を加えられていて、二キロ以上同ナンバーの車に追尾されると警告を発する。

品川駅構内のスーパーからキリをつけてきたのは、スーツを着た男の二人組だった。駅ビルの窓でその姿を確認したが見覚えはない。

刑事かもしれない。ノータイでスーツを着ていて、特に崩れた雰囲気はない。だが刑事ならもう少しまともな尾行をする。刑事でないとすれば、やくざか半グレだが、なぜスーパーで待ちうけていたかがわからない。偶然、スーパーマーケットでキリを見かけ、「いつか痛めつけてやろうリスト」に入っている者だと気づいたのか。

さもなければキリの自宅を知り、でかけるのを待っていたことになる。

いずれにしてもあたりに人けがない場所で排除しようとキリは決心した。

手にしていた買物用のトートバッグを地面におろした。中には卵のパックが入っている。尾行者は角を曲がったところで足を止めた。

「何か用か」

キリがいうと男たちは顔を見合わせた。

「何の話です？」

ひとりがいった。

「俺の勘ちがいかな？　だったらどうぞいってくれ」

もうひとりがジャケットから携帯をだした。ひとと言ふた言喋り^{しゃべ}りかけ、携帯をしまう。ジャケットから抜いた手には拳銃が握られていた。

男との距離は約五メートル。熟練した射手なら、とびつく前に二発は撃たれる。

「オモチャじゃないことは見ればわかるよな」

男はいった。

「確かに本物のようだ」

キリは男を見つめた。

背後からエンジン音が聞こえた。バンが一方通行をバックで逆走してくる。キリのかたわらまできて停止した。

「乗ってもらおうか。乗らなきゃこの場であんたを撃って川に投げこむ。ただの脅しかどうか、プロのあんたにはわかる筈だ」

男はいって銃を握った右腕を顔にひきつけた。銃口はキリの上半身に向けられている。射撃に精通した人間の動作だった。

もうひとりの男が火線をさせんぎらないように近づいてきて、バンのスライドドアを開いた。

キリはトートバッグに手をのばした。

「そいつはおいていけ」

銃をかまえた男がいった。キリは男を見返した。

「買ったばかりの肉が駄目になる」

「あんたが駄目になりたいか」

男の人差し指がトリガーガードからトリガーに移動した。

「わかった」

キリは答え、バンに乗りこんだ。

「一番奥にすわれ」

銃をもった男が告げ、キリが言葉にしたがうと乗りこんできた。一列おいた前の席にすわり、銃口をずっとキリに向けている。

もうひとりの男がバンの扉を外から閉めると、助手席に乗りこんだ。

バンは発進した。きた道に戻って大通りにぶつかると直進する。やがてキリの住居の前にでた。

近くに白のアルファードが止まっていた。

キリの住居の前を通りすぎ、バンは品川埠頭^{ふと}の方角に走った。入国管理局の前を通過すると、一般車は入れないコンテナ置場に入った。ゲートが開いている。

積み上げられたコンテナの陰でバンは停止した。

「ここで片づけようというわけか」

キリは銃をかまえた男にいった。中型のオートマチック拳銃で、口径は九ミリだろう。

頭部なら一発で即死させる威力がある。

「あんたしだいだ」

男は答えた。

「何が目的だ？」

「引っ越す気はないか」

一瞬、言葉の意味がわからなかった。

「地上げ、なのか」

「あんたのことは調べた。並みの脅しを通じる相手じゃない。で、手つとり早く、俺たちが駆りだされた。引っ越しを承諾するか、死体になって東京湾に浮かぶか。あんたが撃ち殺されても警察は驚かない。むしろ容疑者が多すぎて困るだろう」

「まさか引っ越しを断わって撃たれたとは思わないだろうな」

「そういうことだ。ここはプロどし、話をつけよう。恨みはないが、うんといってくれなけりや、

あんたを撃つ。わかるよな。俺は外さない」

助手席にすわる男が立ち上がり、書類と朱肉を、男とキリを隔てる座席においた。

「そいつにサインして拇印はいいんを押してくれ」

キリは書類を手にした。移転承諾書だった。

「サインして拇印を押せば、俺を生かしておく理由がなくなる」

「そうか？　かもしれないな。だとしてもサインは代筆、拇印を死体からとることまでできるんだぜ」

キリは息を吐いた。まったく予想外の展開だった。こいつらは地上げ屋に雇われた殺し屋で、キリの住む家を空き屋にするのが目的だ。

「ペンがない」

書類をひきよせ、キリはいった。

「おっと」

書類をおいた助手席の男がジャケットからボールペンを取りだした。キリにさしだす。

キリはその手をつかむと引きよせた。ボールペンを奪い、男の目につき刺す。

男が悲鳴を上げ、銃をかまえていた男が発砲した。

狭い車内で銃声が耳をつんざいた。弾丸がキリの右肩をかすめ、リアウィンドウをつき抜けた。

キリはボールペンをつき刺した男の体を盾に前にでた。男が撃った。盾にしていた男の体がびくんとはね、力が抜ける。

キリは思わず撃った男を見た。

「油断した奴が悪い」

弾丸はボールペンをつき刺した男の胸の中心に命中していた。即死したようだ。

さらに男が撃った。キリは死体をつきとばし、床に伏せた。

二発、三発、とたてつづけに銃弾が浴びせられた。死体を貫通した弾丸がシートの背もたれを粉砕し、床に穴を開ける。キリは狭いシートのすきまを這って移動した。シートが次々と撃ち抜かれ、バンの最後部まで追いつめられた。

「いき止まりだ」

男がいつて銃をキリに向けた。その瞬間、轟音とともにバンに衝撃が加わった。ウインドウが粉々に砕け、破片が飛び散ると同時に車体が斜めにもちあげられる。

中腰で銃をかまえていた男の体が宙を舞った。バンの天井に叩きつけられ、床に投げだされる。

キリはとっさにシートを床に固定しているパイプにつかまった。それでも嫌というほど肩をぶつけた。

バンは横倒しになりかけ、元に戻った。再びガラスの破片がふりそそいだ。

痛みをこらえ、キリは体を起こした。

白いアルファードの鼻先がバンの横腹にくいこんでいた。金属がひしゃげる音をたてながらアルファードが後退した。

運転席には筋肉ではちきれそうな体にスーツを着けた大男がいた。エアバッグを引きむしり、ハ

ンドルを操作している。

呻き声^{うめ}がした。銃をもった男が撃ち殺した仲間の下敷きになっている。

キリは二人をまたぎこえ、スライドドアに歩みよった。

バンの運転席にいた男がよろよろと立ち上がった。拳銃を手にしていて、キリに狙い^{ねら}をつけている。キリは凍りついた。

バンの運転席の扉が開けられ、外からのびてきた手が銃をかまえた運転手の腰をつかんだ。激しい勢いでひっぱられ、運転手はバランスを崩した。弾みで発砲し、銃弾がバンの天井を撃ち抜く。

運転手の腰を引いたのはアルファードの運転席にいた大男だった。まるで人形をふり回すように何度も運転手の腰をひっぱった。そのたびに運転手は車体に頭や肩を打ちつけた。

手から拳銃が落ち、運転手の目が裏返った。

キリはスライドドアを引いた。車体が歪^{ゆが}んでしまったのか開かない。

「こっちだ！」

大男が叫んだ。

倒れている運転手を踏みつけ、運転席からバンの外にでた。

「急げ」

大男はもうアルファードの運転席に乗りこんでいた。アルファードは鼻先^{つぶ}が潰れ、白い水蒸気を吹き上げているが、かろうじて動くようだ。

キリはアルファードの助手席に乗った。アルファードが後退しバンから離れると、向きをかえた。

パンクした前輪から激しい振動が伝わってくる。それでもコンテナ置場から遠ざかった。

「さすがの君も間一髪だったな」

しわがれた声があった。アルファードの後部におかれた車椅子にすわる老人だ。まるで骸骨のよう
に痩せこけた体を黒いスーツで包んでいる。手には携帯電話があった。

「あんたのほうこそ大丈夫だったか」

キリは訊ねた。老人の名は睦月、裏社会と表社会をつなぐフィクサーだ。睦月は本名ではない。
運転手の大男は如月と呼ばれている。

「この車は特別仕様だな。逆さまになっても車椅子は壊れない」

「車椅子は壊れなくても、あんたが壊れたらそれまでだ」

乾いた笑い声を睦月はたてた。

「銃をつきつけられて車に乗っている君を如月が見つけた。あとを追っていったら、銃声が聞こえ
てな。つつこむように如月に命じた」

「助かった」

キリはいった。

「今頃、礼か」

如月が不機嫌そうにいった。

「きてくれなかったら殺されていた。礼をいう」

キリはいった。如月は驚いたようにキリを見た。

アルファードはゲートをくぐり、よたよたと走りつづけた。同じ道を走るトラックや乗用車が避けるように追い越していく。

やがて息絶えるように停止した。

「ここまでです」

如月が悲しげにいつて、ハンドルから手を離れた。

「じきに代わりがくる。それまで、君を襲った連中の話を聞こう」

睦月がいった。如月が後部に移動し、車椅子と睦月をアルファードの車体に固定していた器具を外した。

「地上げ屋に雇われた殺し屋のようだ」

サイレンを鳴らしたパトカーが近づいてきた。が、アルファードのかたわらを走り過ぎ、コンテナ置場に入っていく。

「地上げ屋に恨みを買ったのか」

睦月が訊ねた。

「そうじゃない。今いる家をでていけといわれた。俺のことを調べ、脅しは通じないと考え、殺すことにしたい」

睦月はあきれたように首をふった。

「三十年前も荒っぽいことをした連中はいたが、いきなり殺そうとするとはふつうじゃないな」

「このあたり一帯を地上げしているデベロッパーで、かなり強引な手を使うとは聞いた」

睦月が如月を見た。

「知っているか」

「トモカ興産というデベロッパーだと思います。社長は女で、九州白央会はくおうかいの金流れこんでいるという噂です」

「なるほど」

頷うなずいて睦月はキリを見た。

「厄介な連中とことをかまえたな」
やっかい

「俺が望んだことじゃない。向こうが勝手に俺を排除しようとしたんだ」

「九州白央会は武闘派の暴力団で知られている。九州の外に縄張りをもたないが、情報網は広い。お前のことを調べ上げたのも、トモカ興産ではなく、白央会だろう」

如月がいった。

短いクラクションが聞こえた。ふりかえると、まったく同じ白のアルファードがまうしろに止まったところだった。

「代わりの車がきたようだ。話のつづきはそっちでしよう」

睦月がいった。新たなアルファードを運転してきたのは黒のパンツスーツを着けた女だった。長い髪を背中で束ねている。

「先生、ご無事ですか」

女は、如月が開けたスライドドアから中をのぞきこみ、睦月に訊ねた。三十に届くか届かないか

というところだろう。色白でひきしまった体つきをしていて、化粧がない。

「大丈夫だ。紹介しておこう。弥生^{やよい}、キリ君だ」

睦月が告げると、弥生と呼ばれた女は感情のこもっていない目でキリを見た。

「弥生です」

「キリだ」

互いにロボットのような自己紹介をした。

「あとは頼んだ」

睦月がいうと、弥生は頷いた。

「お任せください」

弥生を残し、三人は新たなアルファードに移動した。内部の仕様もまったく同じで、睦月の車椅子を固定できる。

運転席にすわった如月が発進させた。壊れたアルファードを追い越し、品川駅の方角に向かう。

「俺を待っていたようだな」

睦月の車椅子の隣のシートにすわったキリはいった。

「頼みたい仕事がある」

睦月は答えた。キリは思わず睦月を見返した。たった今殺されかけたキリに、睦月は平然と仕事を頼む気ようだ。

「忙しかね、今は」

見つめるキリに睦月は訊ねた。

「いや、依頼はうけていない」

「ちょうどよかった。さっきの連中がまた襲ってくるかもしれないが、それは私の依頼をうけても断わっても同じだろう。じつと家にいるよりはむしろ安全というものではないか」

「それはそうだが、いないあいだに家を燃やされてはたまらない」

「留守番の者をおこう。それとも他人には入ってほしくないか」

「見られて困るのはパソコンくらいだ」

「それは君がもてばいい」

キリは頷いた。睦月は頷き返し、

「『白果』^{はくか}という団体の名前を聞いたことはあるかね。香港^{ホンコン}の団体で、中国語ではバイグウオと発音する。銀杏^{いちょう}という意味だ」

「初めて聞く」

「設立したのは白中峰^{はくちゅうほう}という人物で、白は一九八〇年代から、香港のテレビ局でニュースキャスターとして人気があった。一九九七年の中国への香港返還を機にニュースキャスターを引退し『白果』を設立した。体裁はある種の勉強会で、国際政治や経済事情に精通した白とともに未来を展望しようという団体だったが、やがてシンクタンクとして中国や欧米の各国政府に情報を提供するようになった。この数年は、中国政府による香港同化政策に批判的な立場をとり弾圧をうけるようになっていた。『白文書』あるいは『ホワイトペーパー』と呼ばれる『白果』による会員向けのレポ

ートに検閲が入り、近年発行を禁止された。白中峰は四年前から『白果』をカナダに移転する計画をたて、自身の移住も考えていた。だが二年前に肺癌はいがんを発症し、中国本土の病院で治療をうけていたが、ひと月ほど前、死亡したと中国政府が発表した」

睦月は言葉を切り、キリを見た。アルファードは第一京浜に入り、泉岳寺せんがくじのあたりを走っている。「ここからが本題だ。白中峰には子供が三人いる。中国人の妻とのあいだに息子が二人、日本人の愛人とのあいだに娘がひとりだ。二人の息子は現在中国本土にいて、ひとりは中国外務省で働き、もうひとりは消息が不明だ。娘のほうは日本にいる。母親である日本人女性おんなは元日本商社の香港駐在員で、『白果』の運営を手伝っていた。母親の名は岡崎静代おさきしずよ、娘は岡崎紅火べにかという。白中峰の死の直前、岡崎紅火は母親に呼ばれ香港に渡った。『白果』の機密書類を国外にもちだすのがその目的だ。『白果』には、『ホワイトペーパー』の資料となった多くの機密書類が保管されていて、それが中国公安部に渡るのを危惧きぐしたのだ。実際、白中峰の死の発表直後に、公安部による自宅捜索が『白果』の本部に入り、おかれていたコンピュータや書類などが押収された。が、機密書類の大半は岡崎紅火によって間一髪、国外にもちだされた。岡崎紅火は現在東亜文化大学とうあぶんか大学院に在籍し、東京都内に住んでいる。君に頼みたいのは、この紅火の護衛と機密書類の保護だ。中国政府は必ず、『白果』の機密書類を入手しようとする」

「相手は中国政府だろう。保護は日本政府の仕事じゃないのか」

キリはいった。

「本来はな。が、日本政府は中国政府とことをかまえたくない。といって岡崎紅火と書類をあつさ

り中国に渡せば、『白果』の会員や反中国勢力に厳しく非難される。公務員を使つての護衛は難しいといつので、私に相談がもちこまれた。私は適任者を知っている、と答えた」

睦月はキリを見つめ、答えた。

「なるほど。だが期間はどうなる？ 一生護衛することはできない」

「それについては、現在水面下で日本政府がカナダ政府と交渉をおこなっている。交渉がまとまれば、岡崎静代、紅火の母娘はカナダ政府の保護をうけることになり、書類とともにカナダに移る。ただ、問題がひとつある。カナダでは半年後に首相選挙がおこなわれるのだ。現在の首相が再選される可能性が高いといわれているが、それまでは公にカナダ政府も動きにくい状況だ」

睦月は頷いた。

「万一、再選されなかった場合はどうなる？」

キリは訊ねた。

「そのときは日本政府が何か手を考える他ない」

「大丈夫なのか？ 日本政府が、という意味で」

「私もそこは憂慮ゆうりょしている。が、今はまず首相選まで、無事守ってやらなければならん」

キリはつかのま考え、いった。

「わかった。引きうけよう」

「とりあえず君との契約期間は、日本時間でカナダの首相選の結果が伝わる翌日までとする。報酬

は、君の規定にしたがうが、それとは別で、返還も精算も必要ない着手金を渡すことにする」

睦月は告げた。如月が運転席から分厚い封筒をさし出した。

「五百万入っている。中に岡崎紅火の住所、連絡先を書いたメモもある」

「預かっておく。母親もいっしょなのか」

「いや。一週間ほど前から岡崎静代の所在は不明だ。最後に確認されたのは『白果』の本部から香港にある自宅に向かう姿だ。自ら行方をくりましたのか、拉致されたのかは不明だ」

キリは睦月を見つめた。

「拉致されたのだとすれば、身柄と引きかえに書類を犯人が要求してくる可能性はある」

睦月はいった。キリは静かに息を吸いこんだ。

「ひとつ訊きたい。紅火という娘と『白果』の機密書類と、どちらが重要だとあんたは考えているんだ？」

「書類だ」

即座に睦月は答えた。

『ホワイトペーパー』には、中国政府の動向や国際社会との関係に関する予測が掲載されることが多く、それらはことごとく的中した。白中峰は死の間際まで『ホワイトペーパー』を執筆し、それを中国政府に見つからない手段で岡崎静代に届けていたといわれている。そこには当然、中国政府が知られたくない、経済や外交の目標などが記されていたと考えられる」

「だがそれは予測だろう」

「いった筈だ。白中峰の予測はことごとく的中し、西側の情報機関では『ホワイトペーパー』どころか『ホワイトプロフ^予エ^言シー』だと呼ばれていた。であるからこそ、中国政府は白中峰の遺した『ホワイトペーパー』を抹殺したい筈だ」

「西側の情報機関といったな。アメリカか」

「アメリカだけではない。イギリスやオーストラリア、台湾などの情報機関も動いている」

「そういう連中が岡崎静代を拉致した可能性もあるということか」

「むろんだ」

陸月は頷いた。

「岡崎紅火は誰も信用できない状況にある」

「つまり俺のことも信用しない」

陸月はキリを見返した。

「信用されなければ守れないのかね？」

「こちらの指示にしたがわない人間を守るのは不可能だ」

「ではまず信頼を得ることだ」

眉ひとつ動かさず陸月は答えた。

JR新橋駅しんばしでアルファードを降りたキリは、三浦海岸に住む情報屋の佐々木ささきにメールを打った。

『香港の「白果」という団体と主宰者しゅざいしやについて知りたい』

佐々木はインターネットから必要な情報を見つける名人で、睦月がフィクサーであることも、キリは佐々木に教えられた。

即座に返信があった。

『仕事と考えていいのか』

『睦月の依頼だ。着手金の半分を渡す。二百五十万だ』

キリが送ると、

『二時間くれ』

と返ってきた。

『了解』

キリは封筒から岡崎紅火の連絡先を記したメモをとりだした。

住所は文京区小石川ぶんきょうこいしかわのマンションで、携帯電話の番号おほと正しい十一桁けたの数字が記されている。

時刻は午後四時を回ったところだ。キリはその番号を呼びだした。

知らない番号からの着信には応答しないと考えていたが、すぐに、

「はい」

と、若い女の声が応答した。

「キリといいます。睦月という人物にあなたの身辺警護を依頼された」

キリは告げた。女はすぐには何もいわない。

キリは待った。やがて女がいった。

「睦月さんとお話をしたときに警護は必要ないと申し上げたのですが、聞いて下さいませんでした」

「日本政府は表だってあなたを保護することができない。それで睦月は私に依頼したんです」

「政府の人にも守ってもらおうとは思っていません」

女は硬い声でいった。キリは話を変えた。

「お母さんから何か連絡はありましたか？」

「ありません」

「何者かは不明ですが、お母さんを拉致した人間があなたにも危害を加える可能性があるとは思いませんか」

「わたしはそれを待っているんです」

「待っている？」

「母を拉致したのは、父の遺した書類を欲しがっている人だと思えます。わたしは書類と引きかえに母をとり返したいんです」

「誰の協力も得ないでそれは可能ですか？ あなたがさらわれてしまったら元も子もない」

「書類は誰も知らない場所に隠してあります」

「あなたを脅して、ありかを訊きだそうとするかもしれない」

「覚悟はしています」

相当、気が強い。キリは息を吐いた。

「ではこうしませんか。お母さんを取り返すためのサポートを私がします。もし私を信用していたけるなら」

「あなたが信用できる人かどうか、わたしにはわかりません」

「それにはまず会うことだ。不安なら、人がおおぜいいる場所で会いましょう」

キリはいった。とりあえず会わなければ何も始まらない。

間が空いた。

「わかりました」

女はいった。

「わたしは今、大学にいます。キャンパスは水道橋すいどうばしにあつて、東京ドームの向かいです。今すぐきいていただけますか」

「私は今新橋です。三十分もあればいけると思います」

「東亜文化大の正門をぐぐつて歩いていくと、正面にベンチに囲まれた噴水があります。そのあたりにあります」

「わかりました。のちほど」

東亜文化大学のキャンパスはすぐにわかった。外堀通りに面した正門をくぐると、五十メートルほど先に大きな噴水が見えた。キリはそこに向かつて歩いていった。

見渡したところベンチは十脚以上あって、半数以上に若者の姿がある。ベンチの周囲には木立と芝生が広がっていた。かなり広いキャンパスのようだ。

かけ声とともにスポーツウエアの集団がかたわらを走り抜けていった。

キリは木立のかたわらで足を止めた。ひとりでベンチにすわる女の姿を捜した。

不意に背後から気合とともに鋭い殺気を感じ、キリは体を沈めた。頭上を旋風のような回し蹴りが通過する。安易に背後をふりかえったら、頭に命中したろう。

キリは素早く反転した。長いフレアスカートに白いシャツを着た若い女がいた。日に焼けていて、大きな瞳をみひらいている。

スカートに隠されているが、女は左足を深く折り、右足をまっすぐのばして、重心を低くとっていた。片方の腕を体にひきつけ、もう片方の腕を顔の高さでかまえている。

中国武術のかまえのようだ。

「ハイッ」

鋭い声とともに女は体を縦に回した。今度は上から蹴りが襲ってくる。キリは低い態勢のまま、女の軸足を足で払った。

当たったと思った瞬間、女の体が宙に浮いた。キリの足払いが空を切った。

「ハイッ」

女は風車のように体を回し、さらなる蹴りを放った。

二度、三度と女の蹴りはくりだされ、よけていたキリの背が木立にぶつかった。やむなく振りおろされた足を左肘で^{ひだりむし}ブロックした。ブロックしつつも反射的に肘を^{よが}尖らせ、ダメージを与えた。キリが身につけた古武術は防御と攻撃が一体化している。

肘は女の脛に命中した。女の顔に驚きが浮かんた。女は無事なほうの足でステップバックし、キリと距離をおいた。

キリはようやく体を起こした。

「今のは偶然？」

女がいった。

「偶然ではない。受け身を取りながら打撃を与えた」

キリは答えた。女は首を傾げた。

「空手？　ちがう。日本拳法でもない。どんな流派なの」

「流派などない」

女はかまえを解いた。まっすぐに立ち、キリを見つめる。一七〇センチ近い長身だ。

「あなたのそれは中国武術のようだな」

^{ホシケン}
「洪拳」

「聞いたことがある。南派^{なんぱ}少林拳の一派で、洪家拳^{こうかけん}と日本ではいわれている流派か。香港で学んだ

のか」

「あなたはどこで覚えたの？」

女は訊ねた。澄んだ目が鋭い。

「鳥取県の大山だいせんというところだ」

「大山？」

女は知らないようだ。

「一度にひとりしか弟子をとらない師匠から教わった。どんな手を使っても相手を倒すという古武術だ」

女は息を吐いた。

「そんな危険な武術が日本にもあるのね」

「危険すぎて正当な武道の世界では認められなかった」

キリが答えると、女はキリの目を見た。

「その武術を使つて、あなたはボディガードをやっている」

「武術だけじゃない。対象者を守るためならどんな手も使う。卑怯ひきょうといわれても」

女が不意に微笑ほほえんだ。とたんに目が細くなり、愛敬あいきやうのある顔になった。

「試すようなことをしてすみませんでした。岡崎紅火です」

「キリだ」

「キリさん。姓？ それとも名前？」

「ただのキリだ」

「わかりました。わたしのことは紅火と呼んで下さい」

いって女は右手をさしだした。キリはその手を握った。鍛えられた、固い掌^{てのひら}だった。

「いくつから洪家拳を？」

「四歳です。父にいわれて近所の道場に通いました。中学生になってからは大会にもでるようになって」

「自分の身は自分で守れる、と？」

紅火は首をふった。

「そんなに甘くないことはわかっています。ですが簡単に他人を頼ることもしたくありません」

紅火はいって歩きだした。噴水のかたわらに並ぶベンチに小さなリュックがおかれている。リュックをとりあげ、紅火は腰をおろした。隣を目で示す。

「どうぞ」

キリは無言ですわった。すわる前にあたりを見渡す。ようすをうかがっているような者はおらず、目に入るのは二十歳^{はたち}前後の若者ばかりだ。キャンパスという場所柄を考えれば、大人がいれば目立つ。それで紅火はキリの正体を見抜き、いきなり襲ったのだろう。

「この学生だと聞いたが？」

「大学院で比較文化をやっています。ドクターコースに進むつもり」

「教授をめざしているのか」

「そこまではまだ。人の役に立つ仕事をしたいとは思っているけれど。そういえば、ボディガードも人の役に立つ仕事ですね」

いって紅火はくすりと笑った。殺気とともに回し蹴りを放ってきた姿とはまるで結びつかない。

「睦月は俺のことを何といった？」

「何があってもわたしを守ってくれる人だと。警察や軍隊より頼りになる、といわれました」

キリは首をふった。

「とんだ買いかぶりだ。俺にできることなどたかが知れている。睦月をあんたに紹介したのは誰だ？」

「外務省からきたという人でした。わたしの微妙な立場について心配はしているが、日本政府としては何もできない。かわりに相談に乗ってくれそうな人を紹介する、と」

「あんたにとってはよいけいなお世話というわけだ」

キリは紅火に目を向けた。

「睦月も俺もいらぬ節介をしている」

紅火の笑みが消えた。

「そう思っていました、あなたの話を聞いて考えがかわりました。母をとり返すには味方がいたほうが心強い。味方になってもらえますか」

「お母さんを拉致した連中と交渉をしようと考えているのか」

紅火は頷いた。

「当初わたしは、父の遺した書類を渡せば母は帰ってくると考えていました。でも書類を欲しがっている人の中には、自分にとって都合の悪いことが書かれた書類を消したいと思っている者もいる。父の言葉を書きとめ、書類を作ったのは母です。母はずっと『ホワイトペーパー』の製作を手伝っていました。母の頭の中には父が遺した言葉が入っています。この世から書類を消したい人間にとって、母の記憶もまた残したくない筈。となれば、母を返すとみせかけて書類を奪い、母を殺そうとするかもしれません」

「十分考えられる」

キリは頷いた。

「そうならないために、キリさんの力をお借りしようと思いました」

「あんたを守ることとお母さんを取り返す行動が一致しているあいだは、協力しよう」

キリがいうと、紅火は首を傾げた。

「一致しないことなんてある？」

「状況によってはお母さんを見捨ててもあんたを守らなければならない、という事態になるかもしれない。そのときはあんたの身の安全を優先させてもらう」

紅火は目をみひらいた。

「わたしを助けるために母を見殺しにするというのですか」

「そうなったときは」

キリは頷いた。紅火はじっとキリを見つめていたが、

「わかりました。たとえそうであっても、味方がひとりもないよりはマシです」

と低い声でいった。リュックからミネラルウォーターのボトルをだし、ひと口飲む。

「それでお母さんをさらった連中について何か手がかりはあるのか？」

キリは訊ねた。

「今朝、わたしの携帯あてにメールがきました」

スマホをだし操作した紅火が画面をキリに向けた。

『あなたがおもちの書類を買いとりたいと考えている者です。ご興味があれば、直接お会いして値段の交渉をおこないたい。本日午後九時、赤坂のブルーホエールにお越しいただきたい。これが入場チケットです』

ブルーホエールは内外のアーティストのライブ演奏を楽しみながら食事のできる一流レストランだ。添付されたチケットにはペアシートの番号が入っていた。

「送ってきたのは？」

「返信のできないメールアドレスからです。このメールをよこした人が母を拉致したのかどうかはわかりませんが、会って話す以外、情報を得る方法がありません」

紅火は答えた。

「同行させてもらう」

キリがいうと、紅火は再びくすりと笑った。

「何がおかしい」

「キリさんでいつも、そうやって上から目線なのですか。わたしが想像していたボディガードのイメージとちがいます」

キリも苦笑した。

「あなたが想像していたのは、控えめで番犬のようなボディガードだろう」

「映画では皆、そうです」

「こちらのほうがボディガードとしては正統派だ。俺は邪道とっていい」

「どう邪道なの？」

「ひとりで対象者を守る以上、ときには攻撃的な手段をとる。相手が何かをしかけてくる前に、こちらから倒しに行く。場合によっては対象者をおとりにして襲撃者を誘いだすこともする」

「失敗したことはないのですか」

キリは紅火の目を見た。

「ある」

紅火は息を吸いこんだ。キリと紅火は無言で見合った。

「それでもわたしにはキリさんしかない」

つぶやくように紅火がいった。

「呼び捨てでいい。ただのキリだ」

紅火は頷いた。